かわいい七つの子

辻　憲男（文学部教授）

その年の秋、唐招提寺の芳名帳に、亡くなった叔父とそっくりの筆跡を見つけた。同じ署名は飛鳥の安居院（あんごいん）にもあった。節子に古寺めぐりを教えた叔父の「書風」である。戦時中、外交官として欧州の中立国に赴いたが、終戦前にスイスで病死した。その時七歳だった娘の久美子が、今度結婚する。…節子はいっしょに相手の添田に会い、微笑を見せて言った、「妙なことがお耳に入りましたのね？」。久美子の方をちらりと見た。多少、彼女のおしゃべりをたしなめた意味でもあった。久美子がくすりと笑ってうつむいた。「いや、ぼくは、とても興味を持ったんです」。添田はまじめな顔で答えた。彼は新聞記者で、大戦末期の日本側の“終戦工作”秘話を追っていた。そして当時の関係者にあたるうちに、久美子の父がじつは生きているのではないかと思いはじめた（松本清張『球形の荒野』）。

この社会派推理小説はTVや映画で広く知られた。十年ほどして、南の島で元日本兵が発見され（1972、74年）、昭和史の暗部を目のあたりにする思いがした。こういう題材はすでに大仏次郎の『帰郷』にあった。軍に背いて失踪した男が、戦後の京都で娘と再会する話である。松本は大仏の愛読者だったから、小説の最後、フランス国籍を得た老紳士が、父と名乗らずに久美子に童謡を歌って聞かせる場面など、当然『帰郷』を意識したにちがいない。久美子もついて歌った、それは幼い自分が父を思って母と歌った「七つの子」であった。

唐招提寺。鑑真の弟子たちは師の講義を何度も聴いたが、
聴くたびに新しいものを発見した（井上靖『天平の甍』）。